

## 子どもの成長期における他者との関わりの重要性 ～子ども食堂がもたらす予想外の収穫～

杉岡采音

### 論文要旨

本稿は、子どもの成長をサポートできる環境づくりを念頭に置き、親子共々の成長に寄り添っていける子ども食堂づくりとはどんなことが重要であるかを分析することを目的としている。子どもの貧困解決といっても様々な貧困の要因があることがわかった。その中で、本稿では、親子の関わりが少ないという意味での、精神面での心の貧困という事に注目した。そのような家庭は周りからは気づきにくいものではあるが、見逃すことのできない子どもの貧困問題である。まず、先行研究から成長期の子どもの人格形成や、様々な経験によって、子どもの学びにつながり、子どもの成長は、子どもだけでなく親を含め周りの環境も一緒になって良くしていくものであることを学んだ。そして、子ども食堂を利用している親の実態について調査した。その結果、親として子ども食堂に対してレクリエーションを期待していることがわかった。さらにその結果から、仮説として、日常や普段の生活で、親子での関わる機会が少ない人ほど子ども食堂にレクリエーション体験を充実させてほしいと考えている人が多いのではないかと考えた。その結果、親子での関わる機会が多いほどレクリエーションを期待している人が多いという結果になった。そのことから、普段から親子の関わる機会が少ない人にとって、成長期の子どもの様々な経験の重要性を理解していない人が多いのではないかと導き出した。その結果を受け、そのような親子のために子ども食堂はレクリエーションをより充実させ、親にもレクリエーションの価値を知ってもらう良いきっかけの場になる必要があると考察した。さらに、文献や調査の結果だけでは明らかにならない、実際に参加した子ども食堂のレクリエーションの体験を考察した。さらに、今回は新型コロナウイルスの影響で生活様式が変わり、家庭内にも変化が生じた。そこで、コロナ禍の中の家庭内の変化についてもアンケートを行った。その結果、親も子どもコロナの生活に多くのストレスを抱えながらも、今まで以上に親が子のことを知るきっかけになったり、親も子どもも、家庭以外の場での居場所の重要性を知ることもできたりする親子も多いことがわかった。

本稿を通して、コロナ禍によって人と人とのつながりの重要性を身に染みて感じることができ、子どもの成長に他者との関わりや様々な経験は重要であることがわかった。子ども食堂という場の理解に一助となることを期待したい。

### 第1章 問題関心

本稿を作成するにあたって、約2年間の子どもの食堂の学生スタッフとして参加してきた経験したこと見聞きし、感じ取ったこと、アンケート用紙で調査し分析した情報をもとに記述する。近年、子ども食堂が増えて世の中にも浸透しつつある。現在では愛知県内で100以上にもなっている。子ども食堂立ち上げ当初は、孤児や経済的に困難な家庭の子どもにとっての食事を提供する場として広まっていった。しかし近年の子ども食堂は食事提供の場だけでなく、食事を媒介とした人と人のコミュニティをつくる、つながりの場としての役割も果たしている。人と人とのつながりというものは大きな産物があり、子どもの孤食解決、多世代交流、地域のつながり、育児に奮闘する親同士の相談、憩いの場など様々ある。このよう

に子ども食堂は、運営者の気持ちや思いとともに利用者の声や実態を把握することにより、子ども食堂の運営様式は様々な変化を遂げている。

そこで本稿では、つながりということに注目し、子ども食堂の新たな意義として、地域で子どもを育てていける環境を整え、普段、親子の関わりが少ない家庭やより親子でのつながりを持つ機会としての場になればいいのではないかと提唱する。子ども食堂では、母子父子家庭や経済的に困難な家庭では日常的には親は忙しくて子どものことに深くは目を向けてられないこともあるだろう。その結果、親子での時間というのは削られているのではないかと考える。そのような事態というのも近年、家庭の貧困として露見している。そこで気軽に行ける子ども食堂で色々な経験ができれば親子の関わりをより密に築くことができ、親にとって新たな家庭の気づきも発見できるかもしれない。また、今年は新型コロナウイルスが蔓延したことにより生活様式が大きく変化した。それによる家庭環境の実態を把握しながら、子ども食堂の利用者の親子関係を分析する。そして、問題や家庭の現状を導き出し、現代の子ども食堂に求められている事を考え、新たな子ども食堂に求められている事を考え、改善点を導いていく。

## 第2章 先行研究のまとめ

### 第1節 成長期の他者との関わり的重要性

まず、多くの人とつながることや多くの経験をすることが重要で、親子関係や地域の人との関係を築くだけでなく、一人の人間として、自己の成長につながることであるということ、また一人の人として成長することにより、社会にとっても大きな成長につながるのではないかとということについて考えていく。

文豪の夏目漱石の思想によれば、個人主義についてこのように述べている。

第一に自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならないという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならないという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならないという事。と述べられている。これは、簡単に言い直すとある程度修養を積んだ人でなければ個性を発展する価値、権力を使う価値、金力を使う価値もないという事である。もしも人格がないものがむやみに個性を発展しようとする、他を妨害する、権力を用いようとする、濫用に流れる。金力を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらしてしまうかもしれないということである(三好行雄編 1914: )。

このことから、一人の人間として自由に生活するためには、ある程度の経験や学びがないと間違った道にそれる危険性があるため、個性も伸ばすことが難しい、それは、将来伸び伸びと生活していくには苦しいことであるという事である。そのような子が増えた未来の社会というものは、恐ろしいものであると考える。そのため、成長期である子どもの人格形成というものは、将来の社会にも関わる大きな課題でもあるということである。

次に、平野啓一郎は、「私とは何か」ということについて、このように述べている。

たった一つの「本当の自分」など存在しない。裏返して言うならば、対人関係ごとに見せ

る複数の顔（著書では分人と示される）がすべて「本当の自分」である。私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成されている。そして、その人らしさ（個性）というものは、その複数の分人の構成比率によって決定される。分人の構成比率が変われば、当然、個性も変わる。個性とは、決して唯一不変のものではない。そして、他者の存在なしには決して生じないものである（平野啓一郎 2012：7-8）。

このことから、個性を磨くには、他者の存在は欠かせないという事である。子どもの時期に、あらゆる性格、雰囲気、世代の人と関わることにより、自分が今まで知らなかった分人ができ、個性として反映されると考える。さらに、色々なタイプの人とコミュニケーションを取りやすくなる。また、新たな考え方、思考や興味を沸かせてくれたりして、学びにもつながり成長できると考える。また、熊谷晋一郎によると、他と関わり様々なコミュニティができることにより、依存できる先を増やしていくことにより、自立にもつながると述べられている。色々な依存先のコミュニティがあればストレスも溜まりにくいだろうし、交流するコミュニティが複数あれば色々な情報交換や価値観考え方が増えて、それもまた、親子共々自立させてくれると考える。

さらに、安梅勅江によると、絆を育む力（絆育力）は今後の生活の活力やエネルギーを与えるものとしている。人間は誰でも、すばらしい力を秘めて生まれ、その力を存分に発揮するよう、生涯にわたり環境に働きかけ、環境を選択し、環境を作っていく能動的な存在である。社会や自然との「きずな」づくりから、一生涯成長し続ける「人」の現在と未来、現在と過去の「きずな」づくりまで、その人なりの持っているものを発揮する力を育むことが重要であると述べられている。このことから、様々な「きずなづくり」は、あらゆる環境での適応力であったり、社会性を形成されたりなど、生涯のその人の生きていく力の源になり得るということになる。また、血縁や地縁が希薄化する現代社会において、他者と共に、支えられて、その中に自分らしさや充実感を見出す動きが拡大しているとも述べられている。ひとりよがりの自己実現でなく「共感に基づく自己実現」という考え方が見直されている。このように、自己を形成するためにひとりではなく様々な人と関わり形成していく風潮になっているということである。このような現代社会のコミュニティスタイルに合わせて、子ども食堂をうまく活用していけるのではないかと考える。

## 第2節 子どもの心の豊かさ

いつの時代にも子どもの「問題行動」というものがあるがその要因について野島一彦はこのように述べている。心理学的な適応論では、人がいろいろなストレスを受けてそれにうまく対応できない場合、「行動化」（行動がおかしくなる）、「身体化」（身体がおかしくなる）、「習癖化」（変な習癖が出る）、「精神化」（精神がおかしくなる）、「性格化」（性格がおかしくなる）といった不適応状態を示すと考えられている。子どもがストレスを受けてそれにうまく対応できない要因としては、主に「自己」「家庭」「学校」がからんでいる。「自己」という意味では、欲求不満耐性の低さ、人生についての希望の不明確さなどがあげられる。「家庭」という意味では、不適切なしつけ、家庭の不和、児童虐待などがあげられる。「学校」という意味では、知育偏重、受験競争、管理主義などがあげられる。このことから、成長期の子どものストレスというものは、問題行動につながり、さらに性格まがってしまったり悪

い癖がついてしまったりするということがわかる。このことは、将来の重要な人材として社会全体に影響しかねないという事にもなる。そのためにも子どもには自由に伸び伸びと生活することはとても重要であり、また子どもの豊かな生活を守るために親だけでなく地域や周りも一緒になって環境づくりをしていく必要があると考える。

実際にユニセフが公表したデータによると、先進 38 か国を比べた調査で、死亡率が低い一方、今の生活への満足度などが低く、「子どもの幸福度」の総合順位は 20 位だった。調査では、対象は主に 5~19 歳を対象とし、自殺率の数値を比較した「精神的幸福度」、死亡率や肥満の子ども・若者の割合を比較する「身体的健康」、読解力や「すぐに友達ができる」と答えた子どもの割合「スキル」という 3 分野でそれぞれ算出した。日本は、「身体的健康」で 1 位となったが、「スキル」が 27 位、「精神的幸福度」は 37 位となった。つまり、日本の子どもたちは、身体的には健康だが、精神的な幸福度は低いということになる。また、調査の報告によると、子どもの幸福度に関する調査は、公共政策、社会情勢、そして子ども自身や保護者のネットワークに影響されると述べられている。現在、新型コロナウイルスの感染拡大によってさらに子どもたち長期的にマイナスな影響を受けかねないと考えられている。

次に、家庭の特徴と子どもの発達という視点からこのような研究が明らかになっている。子どもの知的発達と社会性の発達に最も重要で一貫した影響力を持っていたのは、母子のかかわりの良質さであると述べられている。母親が子どもに対して感受性が豊かで応答性に富み、子どもに目をかけていて、知的に刺激のあるはたらきかけをしている母親ほど子どもの発達はよりよいものになっていると述べられている。また、母親の好ましい子どもの接し方の中に、抑うつ度の低さ、よりポジティブな性格などの母親要因と関連していると述べられている。他にも子どもの知的・社会的発達の重要で一貫した予測要因にあげられていたのが、家庭環境の質である。規則正しい生活が組み立てられて、本や教育的玩具があったり、家庭内外の活動に積極的に参加していたりする家庭の子どもは発達がより良いとあげられている。このような母親であったり、家庭環境であったりすることにより、子どもの心が豊かになり、好奇心に刺激され、ポジティブな感情も生まれやすいということになる。そのため、子どもの成長に母親という存在はとても重要なものであり、子どもの成長だったり、幸福度の充実をさせたりなどを考えていくためには、母親についても同時に考えていく必要があると考えられる。このような研究結果から、子ども食堂として、子どもだけの視点の改善ではなく、母親視点も入れながら、子どもが自由に遊べる空間、母親の精神的ケア（安らげる場）、家での親子にとってつながりをもつきっかけづくり、今後の家庭、日常生活にもプラスになるであろうことを考えながら子ども食堂の運営を考えていくことが大事であると考えられる。

### 第 3 節 子ども食堂の変革

次に新型コロナウイルスのよって子ども食堂の在り方が見直されているのではないかとということについて考えていく。

コロナによって、衛生面や三蜜などのことを考えると、共食という行為が難しいのではないかと考える。また、コロナの自粛生活でストレスが溜まることも増える人も多くなったと考える。以下では、「選択縁」について上野千鶴子はこのように述べている。

選択縁は、地縁、血縁、社縁のいずれにも還元できない新しい人間関係の領域に対応したものである。選択縁は加入・脱退が自由で拘束性がないため、集団として不安定であり、安定したアイデンティティの供給源になりにくい可能性があるが、これまでの地縁、血縁、社縁のしがらみを超えた絆の可能性を模索できるかもしれない（栗田靖之編 1987:）。

このことから、コロナ禍の自粛生活を機に家庭や職場などの縛られたコミュニティではなく、しがらみ関係なく、行きたいときに行き、自由なタイミングで気軽に息抜きのできる場として、子ども食堂を浅く緩やかなつながりの場というものに見直す良い機会なのではないかと考える。家庭内に親がストレスを抱え込みすぎると子どもにも悪影響を与え、子どもも言う事を聞かず、別の問題がさらに舞い込むなど、悪循環となるためそのような事態を避けるためにもこのような考え方は必要なのではないかと考える。

### 第3章 調査方法

前章では、いかに、つながりを持つことが重要で、親子の関係性を蜜に築くことで、子どもの成長にも影響していくことであることがわかった。

そこで、本稿では子ども食堂でのつながりをもつために、利用者はどのような期待を込めて子ども食堂を利用しているのかを調査してみることにした。

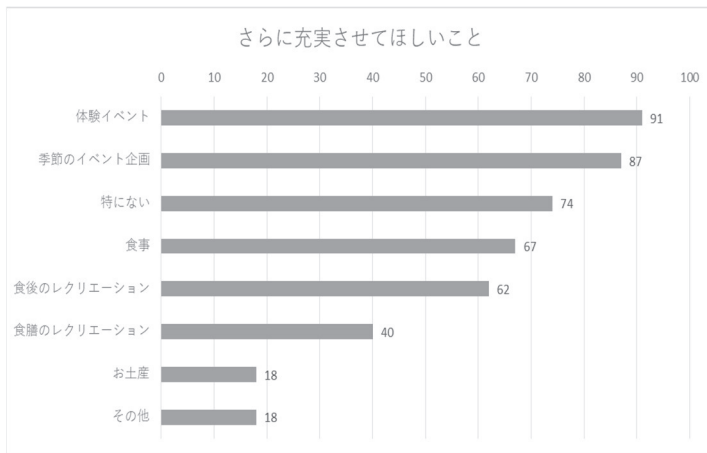
本調査では2019年、1年間を通して行った子ども食堂の経験とアンケートをもとに利用者の声を元に分析する。

#### 第1節 子ども食堂全体の傾向

調査対象は愛知県内及び名古屋市内の子ども食堂を利用する大人である。グラフやクロス集計は以下の項目を利用して集計を取った。

- ・子ども食堂で現在行っていることで、今後さらに充実させてほしいことについて（季節のイベント企画、体験イベント）
  - ・あなたとお子さんの普段の生活について
    - お子さんと遊ぶ（趣味・スポーツ・ゲームなど）機会
    - お子さんに知識や技能（勉強や料理など）を教える機会
    - お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度
    - お父さん（または父親代わりとなる人）の育児に参加する頻度
    - お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会
- まず、今回の調査結果をもとに単純集計を作成し、子ども食堂の現状を述べる。

（表1）現在子ども食堂で行っていることで、今後さらに充実させてほしいことについて



このグラフから、体験イベントと回答した人が91人(29.5%)、季節のイベント企画と回答した人が87人(28.2%)と大半を占めた。しかし、特にないと回答した人が74人(24.0%)いることから、現状に満足している人も多い。

体験イベントそれに続き季節のイベント企画を充実させてほしい人が多いことがわかる。3番目には特にないと現状に満足している利用者も多い中、日常ではできないような体験や季節のイベントに期待を込めている人が多いことがわかる。

このことから、イベントに対して期待を持っている人についてもっと詳しく集計することが重要であると考えた。

●仮説

日常や普段の生活で、親子での関わる機会が少ない人ほど子ども食堂にレクリエーション体験を充実させてほしいと考えている人が多いのではないか。

(表2) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)

×お子さんとの普段の生活について(お子さんと遊ぶ機会)

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)	あなたとお子さんとのふだんの生活についてお子さんと遊ぶ (趣味・スポーツ・ゲームなど) 機会						合計
		ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない	
	回答なし	度数	24	40	56	35	
		13.70%	22.90%	32.00%	20.00%	11.40%	100.00%
回答あり	度数	16	13	16	16	10	71
		22.50%	18.30%	22.50%	22.50%	14.10%	100.00%
合計	度数	40	53	72	51	30	246
		16.30%	21.50%	29.30%	20.70%	12.20%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂でさらに充実させてほしいこと(季節のイベント企画)と答えた人の中で、ほぼ毎日お子さんと遊ぶ機会があると答えている人は、71人中23人で、週に3~4回と答えた人は16人という結果になり、普段の生活からお子さんと遊ぶ機会が多い人ほど、季節のイベント企画を充実させてほしいと考えていることがわかる。

(表3) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)

×お子さんとの普段の生活について(お子さんと遊ぶ機会)

子ども食堂で今後さらに充実 させてほしいこと (体験イベント)	あなたとお子さんとのふだんの生活についてお子さんと遊ぶ (趣味・スポーツ・ゲームなど) 機会						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	46	42	52	17	13	170
		27.10%	24.70%	30.60%	10.00%	7.60%	100.00%
回答あり	度数	28	16	21	9	4	78
		35.90%	20.50%	26.90%	11.50%	5.10%	100.00%
合計	度数	74	58	73	26	17	248
		29.80%	23.40%	29.40%	10.50%	6.90%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂でさらに充実させてほしいこと (体験イベント) と答えた人の中で、ほぼ毎日お子さんと遊ぶ機会があると答えている人は、78人中28人で、次に週に1~2回と答えている人が多く21人という結果になり、普段から週1以上お子さんと遊ぶ機会がある人は、体験イベントを充実させてほしいと考えていることがわかる。

(表4) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)

×お子さんに知識や技能 (勉強や料理など) を教える機会

子ども食堂で今後さらに充実さ せてほしいこと (季節のイベント企画)	お子さんに知識や技能 (勉強や料理など) を教える機会						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	24	40	56	35	20	175
		13.70%	22.90%	32.00%	20.00%	11.40%	100.00%
回答あり	度数	16	13	16	16	10	71
		22.50%	18.30%	22.50%	22.50%	14.10%	100.00%
合計	度数	40	53	72	51	30	246
		16.30%	21.50%	29.30%	20.70%	12.20%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画) と答えた人の中で、ほぼ毎日お子さんに知識や技能を教える機会があると答えた人は16人、週に3~4回と答えた人が13人、週に1~2回と答えた人が16人、月に1~3回と答えた人が16人となり、お子さんに知識や技能を教える機会の頻度関係なく季節のイベント企画を充実させてほしいと考えていることがわかる。

(表5) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)

×お子さんに知識や技能（勉強や料理など）を教える機会

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)	お子さんに知識や技能（勉強や料理など）を教える機会						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	22	41	50	32	23	168
		13.10%	24.40%	29.80%	19.00%	13.70%	100.00%
回答あり	度数	18	12	22	19	7	78
		23.10%	15.40%	28.20%	24.40%	9.00%	100.00%
合計	度数	40	53	72	51	30	246
		16.30%	21.50%	29.30%	20.70%	12.20%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと（体験イベント）と答えた人の中で週に1~2回と答えた人が22人、月に1~3回と答えた人が19人となり、普段お子さんに知識や技能（勉強や料理など）を教える機会が低い人が体験イベントを充実させてほしいと考えている人が多いことがわかる。

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)	お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	11	18	34	56	49	168
		6.50%	10.70%	20.20%	33.30%	29.20%	100.00%
回答あり	度数	3	5	21	33	15	77
		3.90%	6.50%	27.30%	42.90%	19.50%	100.00%
合計	度数	14	23	55	89	64	245
		5.70%	9.40%	22.40%	36.30%	26.10%	100.00%

(表6) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと（季節のイベント企画）

×お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと（季節のイベント企画）と答えた人の中で、月に1~3回と答えた人が33人で、次にめったにないと答えた人が19人と多く、普段お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度が低い人ほど子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと（季節のイベント企画）を充実させてほしいと考えているとわかる。



子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)	お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	13	15	45	56	45	174
		7.50%	8.60%	25.90%	32.20%	25.90%	100.00%
回答あり	度数	1	8	10	33	19	71
		1.40%	11.30%	14.10%	46.50%	26.80%	100.00%
合計	度数	14	23	55	89	64	245
		5.70%	9.40%	22.40%	36.30%	26.10%	100.00%

(表7) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)

×お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント) と答えた人の中で、月に1~3回と答えた人が33人、週に1~2回と答えた人が21人となり、普段お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度が低い人が、充実させてほしいと考えている傾向にある。

(表8) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)

×お父さん (または父親代わりとなる人) の育児に参加する頻度

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)	お父さん (または父親代わりとなる人) の育児に参加する頻度						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	45	26	50	15	35	171
		26.30%	15.20%	29.20%	8.80%	20.50%	100.00%
回答あり	度数	21	7	18	13	9	68
		30.90%	10.30%	26.50%	19.10%	13.20%	100.00%
合計	度数	66	33	68	28	44	239
		27.60%	13.80%	28.50%	11.70%	18.40%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画) と答えた人の中で、ほぼ毎日と答えた人が21人、週に1~2回と答えた人が18人となり、お父さん (または父親代わりとなる人) の育児に参加する頻度が高い人が充実させてほしいと考えている傾向にある。

(表9) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)

×お父さん (または父親代わりとなる人) の育児に参加する頻度

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)	お父さん(または父親代わりとなる人)の育児に参加する頻度						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	39	24	51	16	33	163
		23.90%	14.70%	31.30%	9.80%	20.20%	100.00%
回答あり	度数	27	9	17	12	11	76
		35.50%	11.80%	22.40%	15.80%	14.50%	100.00%
合計	度数	66	33	68	28	44	239
		27.60%	13.80%	28.50%	11.70%	18.40%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと(体験イベント)と答えた人の中で、ほぼ毎日と答えた人が27人、週に1~2回と答えた人が17人となり、お父さん(または父親代わりとなる人)の育児に参加する頻度が高い人が、充実させてほしいと考えている傾向にある。

(表10) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと(季節のイベント企画)

×お子さんが両親(または母親、父親代わりとなる人)と一緒に食卓を囲んで食べる機会

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (季節のイベント企画)	お子さんが両親(または母親、父親代わりとなる人)と一緒に食卓を囲んで食べる機会						合計
			ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない
回答なし	度数	91	30	30	8	14	173
		52.60%	17.30%	17.30%	4.60%	8.10%	100.00%
回答あり	度数	42	6	11	5	5	69
		60.90%	8.70%	15.90%	7.20%	7.20%	100.00%
合計	度数	133	36	41	13	19	242
		55.00%	14.90%	16.90%	5.40%	7.90%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと(季節のイベント企画)と答えた人の中で、ほぼ毎日と答えた人が42人となり、普段からお子さんが両親(または母親、父親代わりとなる人)と一緒に食卓を囲んで食べる機会が多い人が、季節のイベント企画を重要視していることがわかる。

(表11) 子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと(体験イベント)

×お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会

子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと (体験イベント)	お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会						合計
		ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~3回	めったにない	
回答なし	度数	81	29	26	10	19	165
		49.10%	17.60%	15.80%	6.10%	11.50%	100.00%
回答あり	度数	52	7	15	3	0	77
		67.50%	9.10%	19.50%	3.90%	0.00%	100.00%
合計	度数	133	36	41	13	19	242
		55.00%	14.90%	16.90%	5.40%	7.90%	100.00%

このクロス集計から、子ども食堂で今後さらに充実させてほしいこと（体験イベント）と答えた人の中で、ほぼ毎日と答えた人が52人となり、お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会が多い人が体験イベントを重要視していることがわかる。

#### ●結果

日常や普段の生活で、親子での関わる機会が少ない人ほど子ども食堂にレクリエーション体験を充実させてほしいと考えている人が多いのではないかと仮説を立てたが、普段からお子さんと遊ぶ機会が多い人ほど子ども食堂に対するレクリエーションを充実させてほしいと考えていることがわかった。このことから、普段から親子の関わりを持っている家庭でも、より深く関わる機会が必要だと考えている。普段の親子の関わりで多くの気づきがあり、また日々色々な発見があると知っているため、様々な経験の重要性を理解していると考察する。唯一、普段知識や技能の勉強面を教える頻度だけは、頻度関係なくレクリエーションを充実させてほしいと多く考えていることから、多くの親は、勉強はできていないと今後に関わり、将来的に学校でも困るから、大事であると考えている人が多いのではないかと考察する。それ以外の親子の関わりは、別になくても困らないし、いらないと考えている人が多いのではないかと、また、普段の親子の関わりが少ない家庭は、自分たちが普段親子の関わりを持つ機会が少ないとも気づいていない可能性もある。そのため、子ども食堂にレクリエーションを充実させてほしいという結果にならないのではないかと考察する。親子の関わりが少ない人ほど成長期の遊び経験は、他の人と交流する体験、継続する経験、手先の器用さ、頭を使う経験、新たな知的好奇心など学びを得られると理解しておらず、知らない人も多いのではないかと考察する。そのような家庭のためにも、レクリエーション体験を充実させ、レクリエーションや遊びの重要性を理解してもらい、今後の親子関係を見直すきっかけにしてほしいと考える。

## 第2節 実際に経験したレクリエーションの事例

次に、実際に子ども食堂で学生スタッフとして様々な体験や活動、見聞きしたことについて、また、子どもの成長や親子の交流などにつながるのではないかと考えた活動について述

べる。

### ●つな食堂

- ・外遊び、駄菓子屋さん

つな食堂では、周りの公園や緑のある環境をいかしながら、外遊びにも力が入っていて、子どもたちが伸び伸びと遊び過ごせる環境になっている。また、普段から駄菓子屋さんを営業しておりその中で、子どもたちは計算して買い物をしたり、食堂のスタッフと話をしたりする機会もあり、わいわい騒いだり、楽しく過ごすだけでなく将来や今後に必要な経験ができ、成長できる場も用意されている。また、子どもだけでなく親同士の居場所にもなっており意見や情報交換できる場にもなっている。

### ●天白子ども食堂

- ・手作りおやつ（バナナシャーベット、お月見だんご）

射的、輪投げ、風船、バルーン教

射的や輪投げ、着ぐるみを着た人が子どもたちと関わる機会があったり、ピエロの格好をした人がバルーンアート教室を開いていたり、日常では体験できないことであったり、お祭りのようなワクワク感を体験できる機会もあった。バルーンアート体験では、最初ピエロの格好



した人が風船をあらゆる形にしている様子を見て大人も子どもも釘付けになっていた。その後に親子で簡単な風船の作品を創作した。創作中に風船に怖がりながらも一生懸命作ろうとする子や親子で「こどうやってやるの?」と会話しながら楽しそうにやる子、風船が割れて驚いている子などいて様々な親子の様子が見られた。(図1) 射的に関しては、普段子ども食堂へ寄付を行っている企業で射的や輪投げの用具を用意してくださっていて、子どもたちはあまりできない経験に楽しそうに遊んでいた。そのような用具は普段用意するのは大変だが、協力してくださる企業のおかげで行うことができる。特に、男の子は射的をカッコいい物として目をきらきらさせていたように見えた。ゲーム感覚で頭を使いながら、体も使って行う遊びとして最適だと考える。

また、秋にはお月見団子づくりというものもあり、ボランティアが餅まで作り3色の餅に色をつけて、その後は、子どもたち自身に好きな形や大きさに形成してもらって、茹でて食べていた。女の子だけでなく男の子も粘土感覚で自分たちの好きなように形を作っていた。(図2) ちょっとした料理のお手伝いという感覚で、結果的に自分が作ったものを食べるという経験により、みんなで作りながら食



べる食事の楽しさ、食に対するありがたみや感謝の念や、形を形成するという点において創造力が育まれるのではないかと考える。子どもも大人も一緒になってするような経験は、親子のコミュニケーションも増え、思い出に残るだろう。比較的参加していた子どもたちの年齢層が低く、乳幼児から小学校低学年が多く、初めて見たり、経験したりすることが多く、子どもたちの知的好奇心に響いているのではないかと考える。

(図2) お月見団子づくりの様子

●なかがわ子ども食堂

・折り紙、紙工作

折り紙は多くの世代が楽しめ比較的男女関係なく楽しむことができる。手先の器用さを発達させることもでき、難しい折り方があったら、親子で協力しながら、子ども食堂で折り紙を教えるスタッフ側との交流もできコミュニケーションが取りやすく、簡単な遊びで良いと考える。ボランティアスタッフとして参加した時は鶴や口が動くカラスやハートのリングを作って、そのハートのリングは指や腕につけることができるような作品であった。カラスの口を動かしながら遊んだり、ハートのリングを指や腕につけて嬉しそうにしたりしていた。様々な色、大きさ、柄などの折り紙があり、作り終わっても「次、この紙で作ったらどんな作品になるのだろうか？」とまた作りたい欲が湧いてくる子がいて熱中していた。その様子を見て、折り紙は集中力も養われると考える。また、折り紙なら家庭でも持ち帰ってでき、紙があればいつでもできるので、子ども食堂以外の家庭での親子のつながりを持つきっかけとしても最適であると考えた。

●藤が丘子ども食堂

・クリスマスケーキ作り

スポンジケーキをあらかじめ用意しており、それに好きなようにクリームをつけ、果物を配置した。これは自分も手伝いながら行ったが、女の子は「ここに置いたらバナナ多くなっちゃうかな、クリーム使いすぎたらこの後の分足りなくなっちゃうかも」など自分で後のことを考えたりして、装飾していた。私自身手伝いながら、「お姉さん上手！ここに果物置いて！」など



(図3) 飾り付けをしたクリスマスケーキ

ケーキを共同して行ったことにより交流も楽しめたので、親子で行っても会話も増え、親子のかかわりをもつきっかけになり良い経験であると考えた。(図3)

●にっこにこ子ども食堂

・手品、可愛らしい工夫の凝らした献立 (クリスマス)

手品は、うまくできる人が限られているため、子どもにとって好奇心がくすぐられると考える。難しい手品や難しいバルーンアートが行われると子どもはどうなっているのだろうか？なんでこうなっているのだろうか？など子どもが多くの疑問が増え、頭が活性化するのに最適だと考える。実際に手品を見て子どもたちは「え？！どこ？」「なんで？もう一回やって？」と目を見開きながら手品に夢中だった。献立に関しては、学生スタッフとして参加した時期がクリスマスということもあって、献立がクリスマスをモチーフにしたものになっていた。ブロッコリーでクリスマスツリーにしたり、プチトマトとポテトサラダを使っ



(図4) クリスマスの献立

てサンタ風にしたり、柿とブリッツを使ってトナカイにしてみたりなどにして作っていた。その献立を作るとき学生スタッフや運営者同士で話し合いながら、楽しく作ることができ、その作った料理に対して来てくれた親子たちも「かわいい!」「トナカイだ〜!」など会話をしている様子も見ることができ、少しの料理の工夫で会話のきっかけになると考えた。(図4) また、その献立に子どもが喜ぶ様子によって親も子に対して少しでもいいから工夫を凝らした料理を試みよう、食事でも少しの工夫によって、親子の会話弾むきっかけができ、楽しく食事をする事の大切さや重要性を理解してもらおうことができるのではないかと考える。

### ●かたろう子ども食堂

・外遊び、ハロウィンイベント、ブレスレット作り、学習支援(勉強会)おもちゃ遊びなど

外遊びでは暑い日には水遊びをして学生スタッフに対して楽しそうに水をかけていたり、虫取りや鬼ごっこ、かくれんぼをしたりして楽しんでいた。(図5) 虫取りでは躊躇なく蟬に向かって取りに行く子もいれば、少し怖がりながらも興味本位で取りに行く子がいたり、蟬の抜け殻を服に着けたりして遊ぶ子もいて、蟬一つで色々な反応の子どもの姿が見られた。(図6) また、遊びながら子どもによっては、この学生スタッフはたくさん動いてくれる人と認識して鬼ごっこやサッカーに誘ったり、アニメ好きな学生スタッフだとわかり自分の好きなアニメの話をお話してくれる子など、子どもたちもその人それぞれにあった関わり方をしていたり、その人を観察しながら人柄により会話の仕方を考えていて、あらゆる性格、個性の人と関わり子ども自身、人との関わり方を学び、大きく成長できる場であると考えた。(図7) このように様々な人と関わり感情や思考を動かし、その出来事が親子での会話のきっかけになり、親と子どものコミュニケーションにより、子どもの気持ち、考え方、興味や悩みなどを、親は発見できるかもしれないと考えるハロウィンイベントでは、公園内にクイズやあっち向いてほいや、○×クイズなど子どもが考えながら、幅広い世代の子どもが楽しめるような企画を取り入れ、ミッションをクリアしたら、次に進めたり、お菓子がもらえたりするという流れになっていた。

子どもたちは子どもたち同士「この答え何だろう?(あっち向いてほいに対して)がんばれ!!」と友達同士や、また知らない子にも手助けをしたり応援したりしながらハロウィンイベントを楽しんでいる様子がうかがえた。ハロウィンということで、子どもも運営スタッフも仮装をしてハロウィンを子どもとともに運営スタッフも一緒に盛り上がった。その様子を見て、子どもだけが楽しめるようにするだけでなく、親や運営スタッフともに雰囲気づくりすることが大事で、その様子が子どもにも伝染していくのだろうと考えた。ブレスレット作り



(図5) 水遊びの様子



(図6) 蟬取りの様子



(図7) 鬼ごっこの様子

では、ブレスレットやビーズで工作することがとても得意な子がいて、その子のセンスが良く、学生スタッフ側が感心していたらこちらにプレゼントを作ってくれたりもした。このような交流の影響で一生懸命ブレスレット作りやっていて良かったと思ったり、さらに頑張ろうとなったり、誰かにプレゼントして喜んでくれることの感動などあらゆる感情が揺さぶられるだろうと考える。学習支援では、学生スタッフが主に小中学生の勉強のわからないところをきいてあげていた。その中で、学生スタッフにこれわかる？と聞いてきて学生スタッフが反応していたら、向こうの方から、一生懸命これはこう何だよ！と教えられたりすることがあって、この宿題はこうすればいいんだよ！とやっている勉強を説明してきた。その様子を見て、勉強をしていることを見てあげる人や、すごいと褒められることを常にしてあげることが大切なことだと考える。また、どうしても集中力が切れてしまって、周りに迷惑をかけるような子がいるとお互い「うるさいよ！」と指摘しあったり、また全体的に静かに集中しだすとみんな勉強モードにしっかり移ったりしているのを見て、子ども食堂に来て、子どもたちでお互い成長しあっているのだと考えた。単に大人の言われたことを聞いているだけでなく、子どもたちなりにコミュニケーションを取り合っていて良い機会であると考えた。

次に、今年新型コロナウイルスにより今までの生活様式が変化していった。その中でコロナ後の子ども食堂の利用者の家庭生活や親子関係についての変化を述べていく。

### 第3節 新型コロナウイルス禍の中の親子の変化

新型コロナウイルスにより多くの子ども食堂が今までの活動が行えなくなっていて、子ども食堂の運営形態や家庭の生活様式に大きく変化が伴っている。そのような中で子ども食堂に参加している親子に対してコロナの影響で大きく変化した家庭の様子、生活の変化、子どもの様子について、質問用紙を作り調査を行った。

調査対象は、コロナ後に学生スタッフとして参加していたかたろう子ども食堂の運営、利用していた大人と子どもである。

大人は、以下の項目を使って回答してもらった。4人の方から回答を得ることができた。

・自粛生活の中で親子関係の変化（今まで気付かなかった子どもに対する新しい発見や兄弟のコロナ以前と現在を比べた際の様子など）があれば自由に記述

#### 調査結果（大人）

・大人より子どもの方が思うように外出できないでいた。大人より我慢をしてくれていたと思う。会えない友達とは、LINEグループで毎日しゃべりながら同じゲームをしたり、（地上波で放送される）映画の時間に合わせてLINEをしたりしていたのが楽しそうだった。

・大人が勝手に決めてしまうルールが今、コロナの予防の中での暮らしになり、大人の発言の強さを強く感じる。子どもの意見を聞くことをしているのだろうか、もっと子どもの気持ちや意見を聞いて多くのことを決めていって欲しいと思っている。

・自由に友達を誘って遊ぶことができなくなってしまったので、少し寂しそうな姿を見て心配になることがある。家族だけで過ごす時間が増えた分、親子での会話は増えたがお友達や他の大人の人と関わる機会が減ってしまっているのは、子どもの成長にも少し気がかりに

なる面がある。

・子どもも学校で消毒や人とのソーシャルディスタンスをまもれているのですごいなと感じた。そしてやっぱり、自由に人と接して遊ぶことはありがたいことなのだとつくづく感じる。

### ●結果

コロナによって家庭環境にデメリットが多くあるがメリットもあるのではないかと考える。

デメリットは、コロナという事態で大人も非常事態ということもあり、子どもに対して目を向ける余裕がなくなっている。大人の見解が今までの生活よりも強くなり、子どもに対して我慢をさせることが多くなりストレスが溜まりやすいのではないかと考える。それにより、子供の成長に大事な伸び伸びとした自由な生活ができなくなってしまい、子どもの成長の妨げになっていると考える。家族以外の友達や地域の人大人などの交流が減ることにより、親子共々コミュニティが狭くなり、悩みを抱え込みやすくなっていると考えられる。

メリットは、家で過ごす時間が増え子どもとコミュニケーションをとる機会が増え、親子関係を見直すきっかけになる。子どもながらにウィズコロナによる新たな生活様式に適応しようと自分なりに考えて行動しようとしているのではないかと考える。そして、今までの生活で人と会ったり、おしゃべりをしたり、遊んだり、家庭以外のコミュニティでの交流がいかに重要であるかを再確認される良い機会なのではと考える。

また実際に、かたろう子ども食堂に参加したときにお話を聞いたところ、コロナによって、給食のありがたみを再確認したり、保健センターでの健診がなくなってしまったため子どもの体調面の確認ができず、不安になったこともあったり、また外出できないため他の人としゃべることができず、不安を抱え込んでしまい親は鬱気味になってしまう保護者もいたそうだ。外出ができないと家族みんなが家にいることになり、最初は家族そろってご飯食べたり、遊ぶことができたため楽しいと感じていた。しかし、次第に常に家族全員がいることにより家事などのすべきことが増えイライラすることもあり、いつもであればゴールデンウィークなら外にでも出て日常の家事から解放されて、少し息抜きできる場所も、コロナによって外に出かけられず、ずっと家の仕事を行い続けることにストレスが溜まるという声もあった。

コロナにより保育所もやっていないところもあり、未就園児を自分たちで子育てしないといけないことになった。しかし、そのなかで、子ども食堂がやっていたことにより自分たちだけの子ども以外の見守りをしあうことにより、親一人ひとりの負担が減り、お互い様の子育てをしようとする親の姿もあった。親も自分なりに子ども食堂をうまく活用して負担を減らしながら、コロナ直後の生活を乗り切っていた。

子どもは、以下の項目を使って回答してもらった。7名に回答を得ることができた。

○質問1 コロナで嫌なことについて（複数回答あり）

①外で遊べない②学校に行けない③友達と遊べない④勉強についていけるか心配⑤その他  
⑤を回答した人はコロナで嫌な事を自由に記述

調査結果

①0名②3人③3人④3人⑤2人



⑤その他を答えた人

- ・マスクをつけなければいけなくて、じゃまくさい
- ・給食でうつったり、うつらせたりしないか心配

○質問2 今、子ども食堂でやりたいこと(自由に記述)

調査結果

- ・水遊び…3人
- ・みんなで楽しく遊びたい…2人
- ・みんなでご飯を食べたい…2人
- ・早くストラップ作りを再開したい

●結果

質問1の結果から学校に行けない、友達と遊べないという質問の二つに共通している、家族以外の人との交流する機会場の点であるということから、子どもたちも家族以外の人と会えないという事に対して不満を抱えていることがわかる。また、その他として、マスク着用について不満を持っていたり、給食に対しての衛生面の不安をもっていたりなど、今まででなら何も思わないが、コロナという長期にわたる、終わりが見えない生活にストレスも感じていることだろう。質問2では、夏にアンケートを取ったこともあり、みんなと密になって直接じゃれあって遊ぶことをしたい子が多いことが分かった。子どもたちにとって、友達や家族以外の交流のない生活は、とてもきつく、辛いものであるし、大人以上にコロナによってストレスを抱えているし、子どもたちもコロナという現状を理解して、大人に言われたまま動きを制御されているのではないかと考える。

また、実際にコロナ後の子ども食堂に参加した時の子どもたちの様子は、コロナの影響で外に出られず家族以外の人とおしゃべりする機会がないので、子ども食堂に参加した時に運営者、学生スタッフ、また同じように子ども食堂に参加している他の子に対して、話題が尽きず、とにかくおしゃべりしたい子が多いように感じられた。やはり、家族以外の人に話を聞いてもらったり、雑談したりするという事は、子どもにとってうれしかったり、楽しいものであるのだと考える。中には、学生スタッフに外でボール遊びを誘ってくる子もいたりした。そのことから、コロナにより、今まで学校や習い事でアクティブに遊んでいた子であれば、いつものように遊びまわりたいと考える。しかし、普段もし家族の中で運動してくれる人や全力で遊んでくれる相手がいないとしたら、子ども食堂のような場で学生スタッフがいてくれたらよい遊び相手となるのだろうと考える。コロナの影響で、子ども食堂の学生スタッフの価値というのも再確認できた。

子どもたちはマスクして子ども食堂に来ているが、中にマスクをつけ忘れていた子がいたりしてその子に対してマスク付けないとダメだという指摘をしている子もいて、子どもたちもコロナを理解して自分たちにできることを行っていたり、コロナという事を頭に入れて行動をしようとしていたりしているのだとわかった。

## 第4章 結論

### 第1節 遊びに対する理解について

今回のアンケート結果をもとに子ども食堂に来ている親子の日常的な関わりを考察した。その結果、日常的に関わりを持っている親子はレクリエーションの重要性を気づき子ども食堂に反映してほしいと考えている人、普段の親子の関わりが少ないと気づかずレクリエーションの重要性に気づいていない人と二手に分かれているのではないかと考察した。遊びや普段経験できないことは、子どもにとって重要であるということを保護者の人たちがしっかり理解することが重要であると考えた。自分自身、ボランティアのスタッフとしても初めての経験や子どもと関わることで、こういうことに子どもは関心もつのか、子どもと接するときにはどういう点に気をつけるべきなのかなど考えさせられることもあった。つまり、子ども食堂は普段とは違った視点で子どもを見る場であると考え。また、普段と違った環境にいる子どもに与える影響はとても大きく、その子のもつ秘めた能力や普段では気づくことのできなかつた新たな一面、また、今後親として自身の子どものに与えるべきことはないかなど親子共々成長することができる場でもあると考える。そのために子ども食堂は家庭をより良い環境にするために親子の関わりを見つめ直すきっかけになる必要があると考える。また、成長期の親子でのコミュニケーションというのは子どもの将来にも大きな影響を与えると考える。

## 第2節 コロナ禍による気づき

コロナにより大きく今までの生活様式が変わり大変な事も多くなり、親子にも子ども食堂としてもマイナスなことだらけだと考えていたが、子ども食堂にとっての重要な目的の一つである「つながる」というテーマを改めて考えさせられる良い機会でもあるとわかった。そして、友達や知り合いと会って世間話をしたり、遊んだり、顔を合わせることによって、人は安らぎや喜び、息抜きになることを身に染みて感じているのではないかと、それにより、子ども食堂に足を運ぶきっかけになってくれればよいのではと考える。大人たちだけがコロナ後の新たな生活様式を決めているため、子どもは我慢の連続であることが多かったのではないかと考える。

子どもたち自身もコロナの大変さを実感しているため、子ども同士で頭の中にコロナだからということを考えながら行動していることもあり、子どもたちなりにコロナと向き合っている生活をしていることがわかった。それを見て大人は、より子どもの意見や希望などに耳を傾けてあげることが必要であると考える。

## 第3節 今後の課題

遊びを含め、子どもの時期にあらゆる経験をさせてあげることが保護者に理解してもらうための企画や機会の場を設けることもできたらいいのではないかと考える。理解すれば、子ども食堂を利用する親子も増えてくるのではないかと考える。成長期の子どもの好奇心をくすぐるものは何なのか、詳しい専門家に聞いてみたり、子どもたちに直接聞いてみたりして、今後の子ども食堂の企画の参考にするのも良いのではないかと考える。

コロナになり、外にでることができず子ども食堂に参加できず、多くの親子に会いに行けず、コロナ後の親子での日常や親子関係の現状を把握するためのアンケートを多くの人には聞きだすことができなかつたため、アンケートをより多くの子ども食堂の運営者や親子に回答してもらえれば、よりコロナによって気づかされたことやわかったことについて情

報を集めることができると考える。その結果をもとに、より具体的な親子のつながりについて把握して、親子の関わりをよりよくすることにつながることや、それぞれの親子関係や家庭環境に合ったレクリエーションを導き出すことができると良いと考える。子ども食堂だけでなく今後の親子のコミュニケーションに必要なことを考え、より親子の将来に寄り添ったレクリエーションを考えていけたらいいのではないかと考える。コロナにより子どもを地域で育てていく重要性が再確認できたと考える。そのため、地域で子育てをしていくためにできることを考えていけばよいのではないかと考える。

親子のコミュニケーションを密にとるためには、子どもだけに焦点を当てた施策だけでなく親の目線にも立って考える必要もあると考える。子どもが成長するためには、親も成長していく必要があるのではないだろうか。また、子どもの生活を豊かにするためにも家庭での環境づくりも必要だと考える。その環境づくりに子ども食堂を介しながら、行っていくことも今後大事になってくるのではないかと考える。

#### 参考文献・資料

- ・安梅勅江, 国際発達ケア：エンパワメント研究室, 『絆を育む力<絆育力>をつむぐーエンパワメント科学のすすめー』  
(<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/anme/wpsystem/wp-content/uploads/2018/09/ChildScience12.pdf>, 2020年11月22日にアクセス).
- ・安梅勅江, 国際発達ケア：エンパワメント研究室, 『「コミュニティ・エンパワメントー当事者主体のシステムづくりー」(第98回日本小児精神神経学会 特別公演)』  
(<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/anme/wpsystem/wp-content/uploads/2018/09/ComEmp0803.pdf>, 2020年11月22日にアクセス).
- ・安梅勅江, 国際発達ケア：エンパワメント研究室, 『きずな育む力<絆育力>をつむぐーエンパワメント科学のすすめ』(<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/anme/wpsystem/wp-content/uploads/2018/09/ChildScience12.pdf>, 2020年12月13日にアクセス).
- ・夏目漱石, 1912, 「私の個人主義」三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫, 1986.
- ・平野啓一郎, 2012, 『私とは何かー「個人」から「分人」へ』講談社現代新書.
- ・熊谷晋一郎, 全国大学生生活協同組合連合会, 『自立とは「依存先を増やすこと」』  
([https://www.univcoop.or.jp/parents/kyosai/parents\\_guide01.html](https://www.univcoop.or.jp/parents/kyosai/parents_guide01.html), 2020年11月22日にアクセス).
- ・野島一彦, 2012, 「子どもの問題行動の意味」『教育と医学』60(5):2-3.
- ・ユニセフ, 2020 『レポートカード16ー子どもたちに影響する世界：先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か(原題：Worlds of Influence: Understanding what shapes child well-being in rich countries)』
- ・ユニセフ, 2020, ユニセフ報告書『「レポートカード16」先進国の子どもの幸福度をランキング』  
(<https://www.unicef.or.jp/report/20200902.html#annagromada/>, 2020年12月12日アクセス).
- ・日本子ども学会編 菅原ますみ・松本聡子訳者, 2009, 『保育の質と子どもの発達ーアメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から』株式会社 赤ちゃんとママ社.
- ・上野千鶴子, 1987, 「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と

### 謝辞

本稿の調査及び執筆にあたり、ご協力いただきました子ども食堂の方々に厚く御礼申し上げます。多くの子ども食堂に参加し、多種多様な運営形態やターゲット層があることを学び、また、運営している方々の動きや思いなどを、実際に見聞きさせていただき良い経験となりました。また、はじめは研究の道筋が見えなかった筆者に対して、先行研究の紹介から数多くのご教示をいただいた成元哲教授には感謝に堪えません。そして筆者の考えが行き詰まり、まとまらないときに相談に乗っていただいたり、アドバイスをいただいたり、協力していただいたりした成元哲ゼミの同級生、さらに励まし、温かく見守ってくださった方々に、この場を借りて改めて深く御礼申し上げます。